

季節の話題 早春に産卵するカエル



愛媛県には12種のカエルが生息していますが、早春(1~3月)に産卵するカエルは3種です。この3種は、産卵後に水際を離れて草地や林内に生息する地上性のカエルなので、成体を見つけるのは大変です。特にニホンアカガエルとヤマアカガエルは外観も似ていますが、卵塊で見分けることができます。(主任研究員 村上裕)

ニホンアカガエル



12~2月にかけて産卵するカエルで、山間部に分布しますが、ヤマアカガエルと比較して標高の低い場所で産卵します。オタマジャクシの背中には1対の黒い斑点があるのが特徴です。

ニホンアカガエルの卵塊



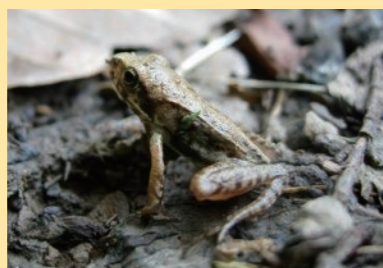
ゼリー部分が固く、卵塊が水中で拡がりません。



背中に1対の黒い斑点

ニホンアカガエル幼生

ヤマアカガエル



12~2月にかけて産卵するカエルで、山間部に分布します。通常2月から3月が産卵のピークでしたが、近年は産卵時期が12月頃から始まっています。

ヤマアカガエルの卵塊

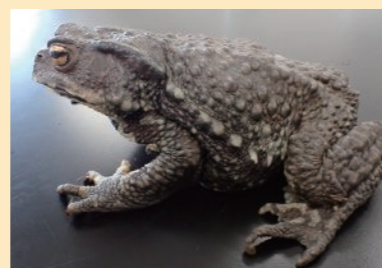


ゼリー部分が緩く、卵塊が水中で拡がります



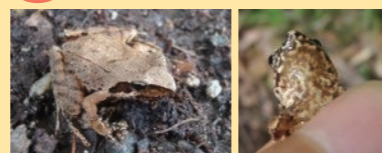
ヤマアカガエル幼生

ニホンヒキガエル



12~2月にかけて産卵するカエルで、卵はひも状です。かつては県内各地に生息していましたが、現在は山間部を中心に分布します。島嶼部では生息数が多い島もあります。成体は在来カエルのなかでは最大級の大きさですが、オタマジャクシは小型。

おまけ ヤマアカガエルとよく似たカエル



ヤマアカガエルとよく似たタゴガエルが県内の山間部に広く生息しています。顎の様子が斑紋状になるのが特徴です。繁殖期は少し遅れて4~5月です。

アルバム 自然観察会や現地学習会を開催しました。



生物多様性センターでは、条例で指定した特定希少野生動植物や、近年問題となっている外来生物などを深く学ぶことを目的に現地学習会を開催しました。また、依頼に応じて各種講習や自然観察会の講師対応も行いました。(主任研究員 村上裕)



令和4年度に開催した主なテーマ

汽水域のハゼ類、コガタノゲンゴロウ、ヨドシロヘリハンミョウ、外来カメムシ類、セアカゴケグモ、カラドジョウ、オオキンケイギク等



写真 自然観察会・現地学習会の様子

特定外来生物 ニートリア

ニートリア(写真1、図1)は南米原産の大型げっ歯類で、1940年代には毛皮目的で養殖されていたが、終戦とともに廃業となり野外に定着しました。愛媛県内では1998年以降の捕獲実績はありません。泳ぎが得意で主に水辺周辺で生息し、年間3~4回繁殖します。愛媛県周辺では広島県、岡山県等に分布しており、水稲や野菜類等の農作物被害が発生しています。

2016年6月、松山市島嶼部で見たことのない哺乳類の目撃情報と写真撮影があり、愛媛大学武山准教授(当時)が聞き取り調査を実施した結果、ニートリアの可能性が強く示唆されました。同年11月には目撃情報の近くでニートリアの白骨化した死体も見つかりましたが(写真2)、それ以降本種の生息に関する確実な情報は得られていませんでした。

2022年7月に、2016年の目撃情報地点と異なる松山市島嶼部でニートリアと疑われる目撃情報があったことから、松山市と生物多様性センターが共同で調査を実施しましたが、捕獲や撮影には至っていません。

有害鳥獣対策で設置した箱わな等でニートリアが捕獲された場合は最寄りの市町または生物多様性センターにご連絡ください。(主任研究員 村上裕)

図1 ニートリアの特徴



写真1 ニートリア(環境省提供)



写真2 白骨化したニートリア(2016年11月 松山市)

図鑑 近年愛媛県で確認された外来生物



近年、愛媛県でも多くの外来生物が確認されており、一部は既に定着しています。特定外来生物に指定されていない種がほとんどですが、今後の動向に注意しておく必要があります。(主任研究員 村上裕、研究員 黒田啓太)



アカハネオンブバッタ

近畿地方を中心に分布拡大している中国原産の外来生物で、愛媛県では2020年に確認されました。本種の侵入地では在来種のオンブバッタとの分布の置き換わりが起っています。



キマダラカメムシ

東~東南アジアに広く生息する南方系の種で四国では1968年に徳島県で確認され、愛媛県では2010年に松山市で記録されました。近年、温暖化の影響で分布が北上しています。



アマミサソリモドキ

九州南部から奄美群島にかけて自然分布しています。愛媛県では1990年以降に今治市で確認されています。サソリに似ていますがクモの仲間です。